

### No.3 六尺の大イタチ

今からはるか半世紀前、信州諏訪の御柱祭。湖水のほとりに怪しげな見世物小屋が出ていた。父にねだって20円払って中に入った。

「命の親」

大きなおわんに白米が山盛りにもってある。この時代、闇米に手を出すことを潔しとしなかった裁判官一家が餓死したという。テンコ盛りの白米は紛れも無くこの時代には「命の親」だった。

「六尺の大イタチ」

「さあさあ見ておいで、見ておいで！ 六尺の大イタチだぁ！ 山奥から昨日捕ってきた大イタチ！ 危ないよ、危ないよ！ 近寄ると足をへし折られるぞ！！」

「おじさん、六尺の大イタチって何処にいるんだい??」

「おめえの前にいるだろう！」

「白い板しかないよ？」

「それが六尺の大イタチだぁ。そりゃあ昨日、ここからはるか登った八ヶ岳の奥山から取ってきたんだ。大きさは六尺あるんだぞお！ その板の真ん中に赤いモノが見えるだろう。そりゃ血だよ。だから「六尺の大板血だぁな！！」

「そばに寄ると足をへし折られるぞって言ったのは何故なの？」

「その板は、厚さ一寸の生木だよ。倒れてきたらおめえの足をへし折るだろう！」

「???'」

